

## これからの保育の展開（Ⅲ）

大坪 邦資

### Future Developments in Child Care（Ⅲ）

Kunisuke OTSUBO

#### I 目的及び研究方法

筆者は前報<sup>1)2)</sup>において、これからの保育の展開に関して報告した。引き続き、研究したので、その結果を報告する。

宮崎女子短期大学附属みどり幼稚園において、年少、年中、年長の各組で、幼稚園教育要領<sup>3)</sup>の改定に当たって、倉橋の著書<sup>4)5)</sup>を参考にし、幼稚園と幼児の生活形態との関係を考えてみるところに意味があると考えられたからである。

目的などについては、前報<sup>1)2)</sup>に準ずることとした。

#### II 結果及び考察

幼児期は、子どもが信頼できる大人に依存しながら、周囲の環境に自らかかわって、遊びを通して心の世界を広げ、自分で考え、自分で判断し、自分で行動できるように、様々な経験をしながら、心身ともに発達していく時である。

幼稚園教育は、目の前の効果だけに目を奪われてはならないことは当然のことで、今更いうまでなことではないのであるが、同一年令のクラス（同じ課程）では、同じ活動を同じやり方で、どの子どもにも行わせようとする指導をする傾向がみられ、教師の思う通りの、まとまりができたと思われ、まさに、目の前の効果があがったと思っているようである。そのところが、倉橋<sup>4)</sup>のいう「何だか変だ。何だか物足りない。幼稚園というところが、もう一つ真に生きたものになれないのか」に、共感せざるを得ないのである。ただ、保育経験の浅い教師の多くは、教育課程の具現化を図る時、同じ課程の他の教師のクラスと同様の活動をさせることにより、クラス経営が何となくうまく行えていると思っているところに、問題があると思われる。それぞれの子どもの興味や関心のもち方の違いから、子ども一人一人の発達する姿が大きく異なってくるし、周囲の環境の受けとめ方やかかわり方も一人一人違ってくるのにもかかわらず、それぞれ異なる子どもに画一的な指導をすることで、教師の気付かない間に、意欲を失わせたり、心を傷つけたりするようなことに気づかないようである。

それではということで、自由保育の形態で保育をすることで、楽しく、自発的に、強制されずに遊ばせたいという思いで遊ばせてみるが、それは、首にカウベルを巻きつけ、好き勝手に、美味しい草を食べ歩き回っている様は、頭にカラー帽子を冠って、好き勝手に遊ぶという放牧そのものであるようである。本来、自由保育とは、子どもの生活の必要感、生活の流れの必然性に即して、子どもたちが自由感をもちながら生き生きと活動するような援助が欠かせないもので、そのために、子どもの活動の様相をしっかりと見つめながら、活動そのものよりも、活動する子どもの内面の気持ちをしっかりと捉えた援助が必要となってくるのである。子どもの心を捉えた援助は、言葉かけや直接的な指導のほかに、待つ、興味深そうに見る、共感するといった間接的な援助も大切な役割を果たすことはいうまでもない。また、自由保育は、子どもの自主性を尊重する保育の考え方でもあって、一斉保育や設定保育と対立するものではなく、自由保育の中でも一斉の形態がとられることもあれば、子どもが自発的に始めた活動ばかりではなく、保育者が投げかけたものでも自由保育になりうるのであるから、真の自由保育であるか否かは、子どもが教師にやらされているという強制感や束縛感がなく、やっている活動に自由感をもって取り組んでいるかということになる。

更に、一人一人に目を注いでいると、全体が見えなくなるので、クラス全員の子どもに目くばりをして、今日何をしていたか克明に記録をとる見まわり保育では、何をしていたかはわかって、遊んでいる子どもの気持ちや内面の課題は見えてこないし、また、一人一人には対応できても、そこだけにどっぷりとつかるとどっぷり保育では、他に援助を必要とされる子どもがいても見落としてしまうことになる。そこで、一人一人の子どもと丁寧につき合って、その内面の気持ちが汲み取れるようになれば、子どもの遊びの流れつまり物語っているものがわかってくるはずである。

以上のことから、これからの保育の展開を考察するとき、保育の営みに重要な意味をもつ、教師の役割、子どもの生活に焦点を当てて述べることにする。

幼稚園教育指導資料第1集等<sup>(6)(7)</sup>では、幼稚園教育の特質から、教師の役割として、

- ① 幼児を理解すること
- ② 幼児との信頼関係を築くこと
- ③ 環境を構成すること
- ④ 直接的な援助を行うこと

を挙げている。

すなわち

- ① 幼稚園生活の全体を通して幼児の発達の実情を把握して一人一人の幼児の特性や発達の課題を捉え
- ② 幼児の行動や発見、努力、工夫、感動などを温かく受け止めて認めたり、共感したり、励ましたりして心を通わせ
- ③ 幼児の生活の流れや発達などに即した具体的なねらいや内容にふさわしい環境をつくり出し
- ④ 幼児の展開する活動に対して必要な助言・指示・承認・共感・励ましなど

教師が行なう援助のすべてを総称して指導と呼んでいる。

このように現行教育要領では、教師の役割は、子どもが発達に必要な直接体験を着実に積み重ねていくことができるように、子どもの実情に即して様々な援助を適切に行なっていくことであるとされている。

それでは、教師は、具体的には、どのような役割を果たさなければならないかといえば、次の6つにまとめられる。

### ① 子どもを理解する

教師の役割の中でも、最も大切なことの一つは、子どもの発達する姿を、具体的な生活を通して的確に捉えることにある。

子どもの生活する姿というものは、入園してから修了するまでの園生活の経過に伴って、様々なに変化し、また、やや、園生活に慣れてきて、周囲のものに目が向くようになると、おもしろそうなものには何でも興味を示し、自分でやってみようとしたり、気の合った友達と遊ぼうとしたりするようになる。こうした園生活全体を通して、どのように子どもの生活の様相が変化していくのかというプロセスを捉えながら、その中で、子どもに何が育とうとしているのか、また、どのような体験を積み重ねてきているのかということなどを、的確に受け止めていくことが大変重要になる。このように、子どもの生活する姿から発達の過程を捉えることは、教育課程を編成したり、指導計画を作成する場合も欠くことのできないものである。

また、子どもの発達は、回りの環境との相互関連によって促されているものであるから、園の実態や教師のかかわり方、家庭での生活の実情等にもよっても違ったものになるので、どの時期に、どのような生活を子どもに展開しているのか、その中で子どもの興味、関心、欲求はどのように広がったり、深まったりしているのか、友達との関係はどうなっているのか、などを詳細に見つめ、その実情を正確に捉えていくことが大切となる。

更に、子どもの発達は、それぞれの子どもの中に何が育とうとしているのか、あるいは、その子どもにとって必要な経験は何か、といった発達の課題は、一人一人で異なっていると考えられるし、同じ環境のもとで生活していても、その環境に対する受け止め方や感じ方等は、一人一人異なっているし、かかわり方も違ってくるのである。

更に、客観的には、たとえ同じような活動をしているように見えても、一人一人の子どもの意識や活動のもつ意味は違ってくる。したがって、教師は、こうした子ども一人一人の特性や発達の実情に即して、適切な指導を行なうべきである。

このような子どもの発達する姿は、子どもと生活を共にすることによって、初めて見えてくるようになるのであって、外側から、漫然と眺めているようなことでは、把握することはできないと思われる。

教師が遊びの仲間になったり、子どもの視点からものを見たり、子どもの発見や感動を共有したりしながら、子どもの興味や関心、心の動き等を感じ取っていこうとすることで、子どもの発達する姿は見えてくるようになるのである。

### ② 子どもとの間に信頼関係を築く

子どもは、自分が誰かに、いつも温かく受け止められ、見守られているという安心感・安定感を基盤にして、自分から周囲に働きかけ、自己を形成していくのである。また、幼稚園は、子どもが主体性を発揮しながら、発達に必要な力を自ら獲得していく場でもある。そのために、教師と子どもとの間に信頼関係が成立していることが必須条件となるのである。

補足になるが、幼稚園教育において、子どもの主体性を重んじることとよくいわれるが、この主体性について、文部省初等中等教育局小田豊視学官によれば<sup>8)</sup>、主体性というものは、3つのものから成り立っていると述べている。

ひとつは、自発性である。これは、興味、関心という取りかかっていく力であって、この力は主体性にとって、とても大事であるが、主体性イコール自発性ではない。取りかかる力はとても大事にされるのであるが、大事なのはそれを持続することである。

主体性の2つの目はこの持続性、続けるという力である。続けるということは、我慢する力である。つまり、もうやめたいな、でも自分が始めたんだよな、もう一回工夫してやり直そうかな、続けようかなというこの葛藤のことであって、この葛藤するということ、我慢するという力の中で、持続性が育つのである。

3つ目は自律性である。これは、幼児期並みの自律性であるが、心を律するということであって、最後までやり遂げる力である。言い換えれば充実する力である。

以上のことから、子どもの主体性について整理してみると、子どもたちが、主体的に生きるということ、主体性をもつということは、どういうことかということ、取りかかって、それを我慢したり、統制したり、続けるという力をどう身につけて、最終的に自分は、ここにいてよかったという充実する力をつけることであって、それがあってはじめて主体性になる。と説明している。

子どもとの信頼関係は、何よりもまず、教師が一人一人の子どもをかけがえのない存在として受け容れ、愛情をもってかかわることから始まるし、子どもが教師を信頼するということは、教師が子どもを信頼するということである。子どもの具体的な一つ一つの行動を、否定的に見る、安心して見ていられない、というのではなく、肯定的な温かい関心をもって子どもを見つめ、必らず望ましい方向に向かうという信念をもって、いつでもどんな場合でも「先生は待っているよ」という気持ちで子どもに接していくことが大切である。

また、子どもは、自分が発見したこと、感動したこと、努力したこと、挫折したこと、葛藤等を温かく受け止めて、認めたり、共感したり、励ましてくれる教師に対して、心を開き、信頼感をもつようになる。

つまり、一人一人の子どもを理解しようとするプロセスそのものが、教師と子どもとの間の信頼関係を築くことになり、子どもの発達を望ましい方向に促進していくための援助でもあるということができる。

### ③ 環境を構成する

幼稚園における教育は、環境を通して行われるものであることから、子どもの生活する姿を十分に踏まえ、子どもの発達にとって必要な経験を着実に積み重ねていくことができるような環境を生み出していくことは、教師に期待される大変重要な役割である。

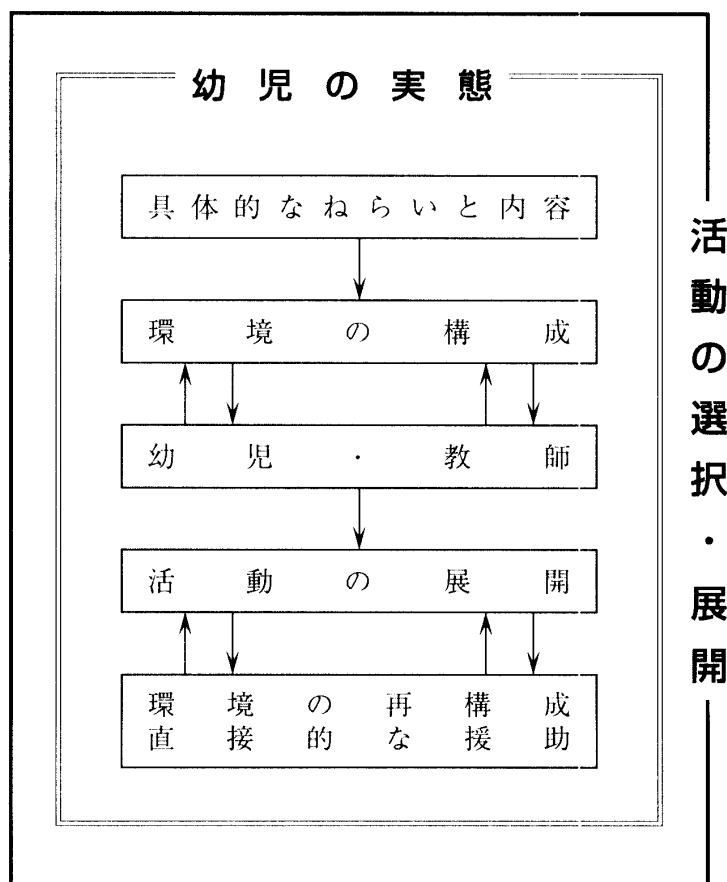
子どもの発達の実情や生活の流れに即して、材料、遊具、用具等、子どもがかかわる対象をどのようにするか、ということを考え出さねばならないのは、当然のことであるが、それと同時に、自然の変化等に興味や関心を向けたり、身近な物や出来事等が、子どもの生活にとって意味をもつようにすることが大切である。

更に、子ども相互のコミュニケーションを図ったり、活動に必要な情報を提供したり、子ども同士の遊びを交流させることなども欠くことのできない環境の構成である。

しかし、何といても大切なことは、子どもの側に立つ保育の創造ということから、環境の再構成ということを抜きにしては考えられない。環境の再構成は、環境にかかわって生まれてきた活動への問い直しから始まるので、その子どもは、活動を通して何を楽しんでいるのか、何を実現したいのかを探りながら、その活動が、その子どもの発達にとってどんな意味があるのかということを知る事なのである。活動の問い直しによって、更に、子どもの発達を見通し、新たな援助の方向を考える。つまり、子どもの活動を問い直すことによって、新しい状況を作り出し、環境の再構成をしていくことになるのである。子どもの気持ちや思いを問い直し、発達を問い直すうちに、必然的に環境は再構成されていくのである。この意味で、指導は環境の再構成の繰り返しということができ、教師が果たさなければならない最も大切な役割である。

なお、具体的な活動は、どのようにして生まれてくるかについては、およそ次のような過程を経て行なわれる。

- ア) 具体的なねらいや内容に基づいて環境を構成する。
  - イ) 幼児が自ら環境にかかわって活動を展開する。
  - ウ) 幼児が望ましい方向に向かって活動を展開していけるように、教師が適切な援助を行なう。
- その関係を図示すれば次のようになる。



図一 1 幼児の具体的な活動の起こり方の関係

#### ④ 子どもの生活のモデルとなる

幼児期は、親や教師等、生活の中で親しんでいる大人の生活感情や、行動をそのまま自分の行動に取り入れていく傾向が大変強い時期であるし、子どもは、自分が信頼を寄せている教師の言動を、心の動きまで含めて、生活のモデルとして自分の中に取り込んでいくのである。この意味で、教師は、環境を構成したり、再構成したりすると同時に、自分自身が環境の中核として機能していることを十分に認識して指導に当たっていかなければならない。

例えば、自然の動きに敏感に反応し、感動をもてる教師と、いろいろなことが身の回りに起こっても、ごく当り前のこととして見過してしまう教師とでは、毎日の生活を共にする子どもの態度等に違いが出てくるのは当然のことである。

幼稚園においては、教師自身の言動や物事に対する姿勢が、子どもの発達を促していく上で、重要なモデルの役割を果たしていることを、十分認識することが大切である。なお、このことは、津守真<sup>9)</sup>が、先生の言った言葉は、私的なものではなくて、公的になるといっていることからわかる。

#### ⑤ 子どもの体験を支える

同じような場面や出来事に出会ったとしても、周囲の状況やその場を受け止める人の姿勢によって、子どもの体験は全く違ったものになる。幼稚園生活は、子どもにとって、親から離れて初めて体験する集団生活の場である。子どもにとっては、教師はただ一人の頼りとする存在であり、教師の反応によって、自分の行動を決めていく存在でもあるので、教師の応答は、子どもの意欲や態度を育てる上で、きわめて重要な役割をもつのである。

幼稚園という時期は、子どもの興味や関心、探究心が急速に広がる時期でもあるし、そして、気付いたことや感じたこと、思ったこと等を回りの大人や友達に伝えようとする気持ちが高まってくる。ところが、せっかくの発見や驚き、感動等も、そのことに共感して受け止めてくれる相手がいなかったり、それを表現する機会や場がなかったりすると、そのまま薄れてしまうことはいうまでもない。したがって、幼児期に豊かな体験をもつことの大切さがいわれているのである。

子どもは、身近に起こる様々な事象に出会い感動する。大人から見ると、ほんの些細な、つまらないような出来事であっても、子どもは目を輝かせて、見入ったり、触れたり、試したりしようとする。物事に感動すれば、それをもっとよく見よう、試してみようとする興味や関心が起こり、更にそれが新たな感動を呼び起こすことになる。子どものこのような感動体験が、イメージとして心の中に蓄積されることによって、知的好奇心や探索行動が活発になるといった循環を生み出すのである。

子どもの体験は、教師の認める、共感する、励ますなど、適切な応答によって、初めて子どもの成長、発達に役立つ体験となるといえる。

#### ⑥ 子どもに対し、直接的な援助を行なう

子どもが環境にかかわって展開する活動を大切にして教育を進めるためには、一人一人の子どもが発達に必要な体験を着実に積み重ねていくことができるように、必要な助言や指示、即ち子どもに直接的に働きかけ、援助していくことが、教師の大切な役割である。この直接的な援助の中でも、とりわけ、承認・共感・励まし・称賛・アイディアの提示・手助け・相談相手・活動の方向づけ・

内発的動機の刺激・モデリング等は、子どもの活動を豊かに展開し、体験を確かなものとするために欠くことができないものである。

また、子ども自身が、生活する中で必要とする知識、技能、態度等を獲得するために、適切な助言や指示を与えるなどの直接的な援助も教師の大きな役割の一つである。このことは、基本的な生活習慣の形成、思考力の芽生えを培う指導、文字や数量に関する指導、様々な技能の習得に関する指導等として、現場では常に話題になり、問題として取り上げられてきている。

以上、保育に当たって重要とされる教師の役割について述べてきたが、次に、幼稚園教育要領<sup>3)</sup>では、総則における幼稚園教育の基本として、幼児は安定した情緒の下で自己を十分に発揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮して、幼児の主体的な活動を促し幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること、と幼児期にふさわしい生活の必要性を強調している。

一方、保育所保育指針<sup>10)</sup>では、その総則において、保育所における保育の基本は、子どもが健康、安全で情緒の安定した生活ができる環境を用意し、自己を十分に発揮しながら活動できるようにすることにより、健全な心身の発達を図るところにあることを強調し、更に、保育の原理では、十分に養護のゆきとどいた環境のもとに、くつろいだ雰囲気の中で子どもの様々な欲求を適切に満たし、生命の保持及び情緒の安定を図ることの必要性を述べている。

教師の役割の重要性の③環境を構成するの中でも述べたが、保育は、子どもと保育者の共同の創造活動であることから、子どもを一方向的にしついたり、教えたりするのではなく、教師もともに生活する中で、驚いたり、発見したりするという、ともに生きる生活は大切なことである。したがって教師の役割もふわしい生活にとって重要である。

子どもにふさわしい生活について考察を加えていくことにする。

子どもの視座から見た保育をするために、何が一番大事かということ、その子にとって、ということである。つまりは幼児期という全体像もあるが、一人一人にふさわしいということが含まれていると思われる。ただ、保育者として、あるいは、大人として、子どもを早くから自立させなければいけない、自分でできることばかり評価していた面があったが、それでも子どもは人に甘える。この甘えるというとは、大好きな人がいて、体ごとその人に寄りかかっていくことであって、それは、ある意味では、自分らしさを安心して出せるという生活の一番大事な基盤なのである。早く自立すると大人にとって都合がいい。そういう子どもではなくて、もっともっと手をかけていくことによって、その子がその大人に十分自分らしさを出せるようになることが大事なのではないかと思う。幼稚園・保育所・小学校連絡協議会に会って、いつも問題になることであるが、幼稚園等では、とにかく生活習慣だけは、しっかり身に付けて欲しい。例えば、聞く態度・片付け、それさえやってくれば、その後は小学校で引き受ける。まさに、大人にとって都合がいい、教えるのに楽しみたいという考えにほかならない。

聞くということは、相手に対して心を開くということであって、園で大事なものは、聞くことで得をする。おもしろいから聞く。そうするとうれしいことがいっぱいある。これが幼稚園での生活であって、今井和子<sup>11)</sup>は「ことばの中の子どもたち」の中で「私とあなた」という関係が成り立たないときに、子どもは本当に聞こうとはしないと述べている。子どもが聞くといったときに、大人の言葉をどう聞きとめるか、かなり選別して聞く。それは、子どもが、結構アンテナを張り巡らしている

ということでもある。子どもも自我が育ってくると、他人の言葉を選んで聞くという作用が伴うが、どうしても大人のほうに子どもを引っ張っていくことになってしまいがちなので、子どもの次元でかかわっていく必要がある。つまり、保育者側が子どもの側のことをちゃんと聞こうとすると、子ども一人一人を認めようとするというプロセスを飛びこえて、子どもの方だけに一方通行になっていくみたいになってくると、生活ではなくなってくるような気さえするのである。

倉橋惣三<sup>41)</sup>は「生活の教育化」と「教育の生活化」では、生活の使い方が違うといている。学校教育は教育の生活化だといっている。幼稚園では、まず子どもと一緒に生きていく生活があって、そこに大人の思いも添わせていく、そういう生活をするべきと唱えている。子どもたちが、まずその園でほっとする。そして、自分らしさを出せるということが、生活の拠点になるということである。更に、倉橋<sup>41)</sup>は、園の生活は、川の流れのようなものだ。ずっと流れていくけれども、でも流れが変わってはいけないうと、そうではなくて、変わる必然性がある時は、変わっていくことが大事で、その生活の必然性が問題であるともいっている。ただし、その必然性は子どもにとっての必然性でなければならない。

また、生活づくりをするときは、単線で行くのではなくて、いろいろなことを考えていくことが生活の豊かさへとつながっていくのである。

幼稚園の生活は、イコール遊びであるといわれている。

その遊びについて考えてみると、保育者がやる、仕掛けと操作には違いがある。仕掛けてもいいけれども、仕掛けは裏切られることもたくさんある。たくさんあるから、保育は楽しくなる。しかし、操作は必ずそうになっていくということで、その意味では、考え直す必要がある。例えば、本園のお泊まり保育を年長組でやったのであるが、切手を貼った手紙が幼稚園にとどいた。内容の抜粋になるが、「ばらぐみ・うめぐみ・きくぐみのこどもたちへ あしたは いよいよ おとまりほいくですね。 わたしは ひのかみさまです。このてがみを だしたあと すぐ“ひのくに”をしゅっぱつして、あしたの キャンプファイヤーに あそびに いきます。 キャンプファイヤーの ひには、 みんなの パワー がひつようです。」以下略。このように「手紙が本物の切手を貼って来たよ」というのは、保育では、よく使われる手法で、いわゆる仕掛けである。ところが、これを仕掛けと取るか、操作と受け止めるかによって、保育は違ったものになってくる。当日は本物の手紙として受け容れられたのは、当然であったが、お泊まり保育が終わって、次に登園して来た、年長組の男児が、強い太陽を浴びながら、額も背中も汗びっしょりになりながら、既に燃やしてしまったパワーの素になる星があると信じ、キャンプファイヤーの場所を、星捜しのために、せつせと土を掘りおこした状況を見たとき、仕掛けが操作になっていなかったことが、確信でき、保育の楽しさを改めて感じさせられた思いであった。このことは、広い意味でいえば、自然な生活形態を保障したということにつながると思われるのであるが、倉橋<sup>41)</sup>は、これをさながらの生活と呼んでいる。そして、保育はこの、さながらの生活を捉えて、これを出発点にすることから始まるといっているし、このことが、倉橋<sup>41)</sup>のいう「生活を、生活で、生活へ」につながると思われる。

以上で、これからの保育の展開に当たって、教師の役割の中で、環境の構成、環境の再構成、幼児の主体性、また、子どもにとっての生活などの重要性について述べてきたが、我々、私立幼稚園にとって、園児がいなければ、いくら保育の重要性を述べてみても始まらないことからして、園児確保は最重要課題であることはいうまでもない。



本園は、園則によれば認可定員は290名である。文部省学校基本調査による毎年5月1日現在での本園の園児数は次の通りである。

表一 1 みどり幼稚園園児数の推移

年 度	昭和 63	平成 元	2	3	4	5	6	7	8	9
園 児 数 (名)	278	273	250	244	240	251	237	225	226	217

現在、宮崎県内の幼稚園数は、私立幼稚園が120園、(1園休園中)、国・公立幼稚園が29園である。園児数(現員数)が200名を越す幼稚園は、私立幼稚園の3園のみである。全日本私立幼稚園連合会の調査によれば、宮崎県の私立幼稚園の平均園児数は、全国の中でも最下位に近い、1園の平均園児102名となっている。このことからわかるように、本園が園児数200名を、過去10年以上維持しているということは特筆すべきことである。

本園の保育を考えると、教育は見えるものになっていなければならないと、常に考えているところである。それは、実際の保育場面に教育が現れていることである。教師の保育行動、子どもへのかかわり方、声のかけ方、援助の仕方、教師の手を出すタイミング、そうしたことが、保育場面に現われてこそ、教育が見えるといえるのではないかと思う。教師が同僚の保育の中に、本園の保育観を見たり、自分の保育行動の中に、園の姿勢を感じ取ったり、あるいは、明日の保育を考えると、自分の所では、何を大事にしているのか、何を目指して教育をしているのか、教育の根源って何だろうかということ、自分自身の保育と結びつけて考えられてこそ、教育が見えるものになってくるということを、機会あるごとに話している。そのためには、自分自身の保育を問い直し、評価・反省を常に怠らずやっていくことで、保護者にも、地域にも、保育が見える形で伝わり、園児数の激減がないものと思っている。

また、常に保育の本質を見極め、よりよい保育を目指して研鑽してくれる職員に拠るところが大である。

最後に、我々は、日々の保育の営みの中で、幼稚園教育要領<sup>3)</sup>を理解した上で、子どもにとっての保育の意味をしっかりと把握する必要があるし、それには、小田豊<sup>12)</sup>のいう、幼稚園教育の在り方について、十分心して捉えなければならないと考える。

子どもが遊びに夢中になり没頭しているとき、その子どものよさが溢れ出し、輝いている姿がある。その輝きに心から感動し、うなずき、寄り添ってゆく教育を実現し、それを保護者に伝えていく。幼稚園教育に求められているのはそういうことではないか。一人一人の子どもの主体を大切に、学びの楽しさを大切にする子どもの側に立つ教育の転換なしには、それはできないことである。

幼稚園教育が、環境を通しての教育、生活を通しての生きる力としての学びの基礎を形成することへと転換し、それを確立していくための最初の一步で、すべてであるのは、「子どもたちと決定的につきあってみてください」ということになる。子どもたちと決定的につきあうということは、子どもたちの心を動かし、聞くことなのである。そのためには、共感的人間関係が成立しなければならない。つまり、子どものためではなく、子どもとともにが本物にならなければ、生き方への

学びにはならないのである。

つまり、子どもたちと決定的につきあう、子どもから出発して子ども自身に還るということは、学びの基礎を形成するための中核に教師の存在が大きいということである。

## 参 考 文 献

- 1) 大坪邦資：これからの保育の展開，宮崎女子短期大学紀要，第18号，1992.
- 2) 大坪邦資：これからの保育の展開（Ⅱ），宮崎女子短期大学紀要，第19号，1993.
- 3) 幼稚園教育要領，平成元年文部省告示第23号.
- 4) 倉橋惣三：幼稚園真諦，フレーベル新書10，フレーベル館，1989.
- 5) 倉橋惣三：育ての心（上），フレーベル新書12，フレーベル館，昭和62年.
- 6) 文部省：幼稚園教育指導資料第1集指導計画の作成と保育の展開，フレーベル館，平成3年.
- 7) 文部省：幼稚園教育指導書増補版，フレーベル館，平成元年.
- 8) 小田 豊：第9回全日本私立幼稚園連合会教育研修協議会平成8年度研究集録VOL.12，全日本私立幼稚園連合会，平成9年，pp.27-28.
- 9) 森上史朗他：保育の基本2生活と遊びを通しての保育とは，フレーベル館，1997年，p.187.
- 10) 厚生省児童家庭局：保育所保育指針，フレーベル館，1990年.
- 11) 今井和子：ことばの中の子どもたち 幼児のことばの世界を探る，童心社，1986.
- 12) 文部省幼稚園課内・幼稚園教育研究会：幼児一人一人のよさと可能性を求めて，東洋館出版社，1997，pp.93-105.

[1997年11月29日受理]